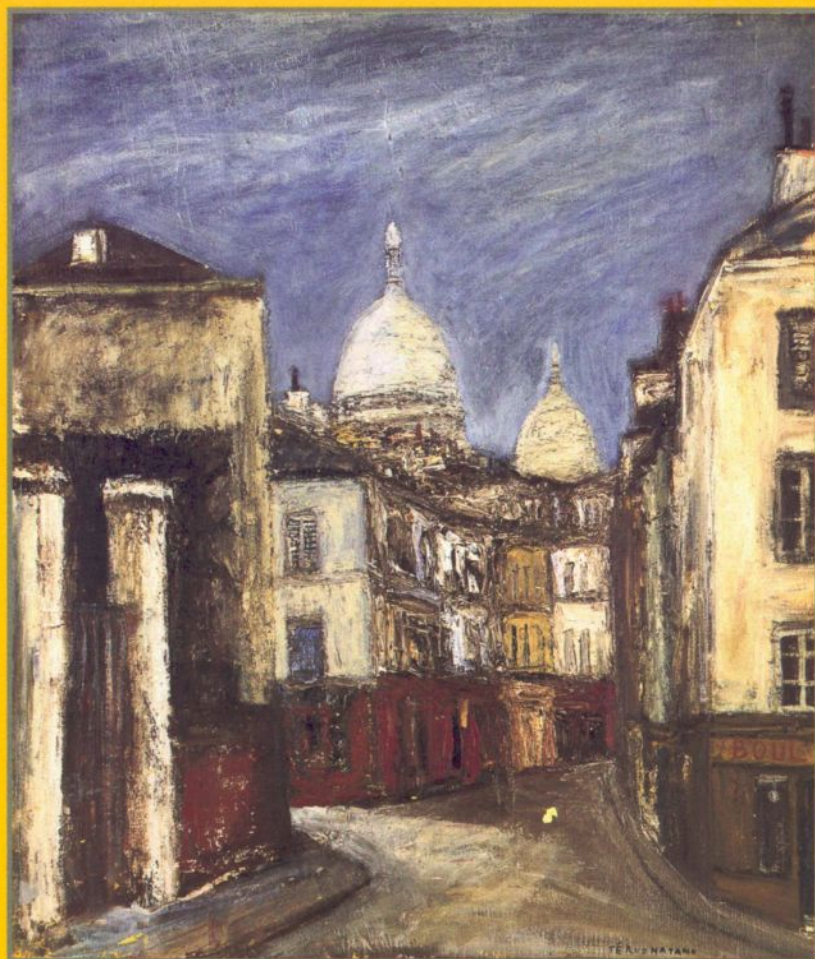


田中照雄

1935—2004



畑農照雄

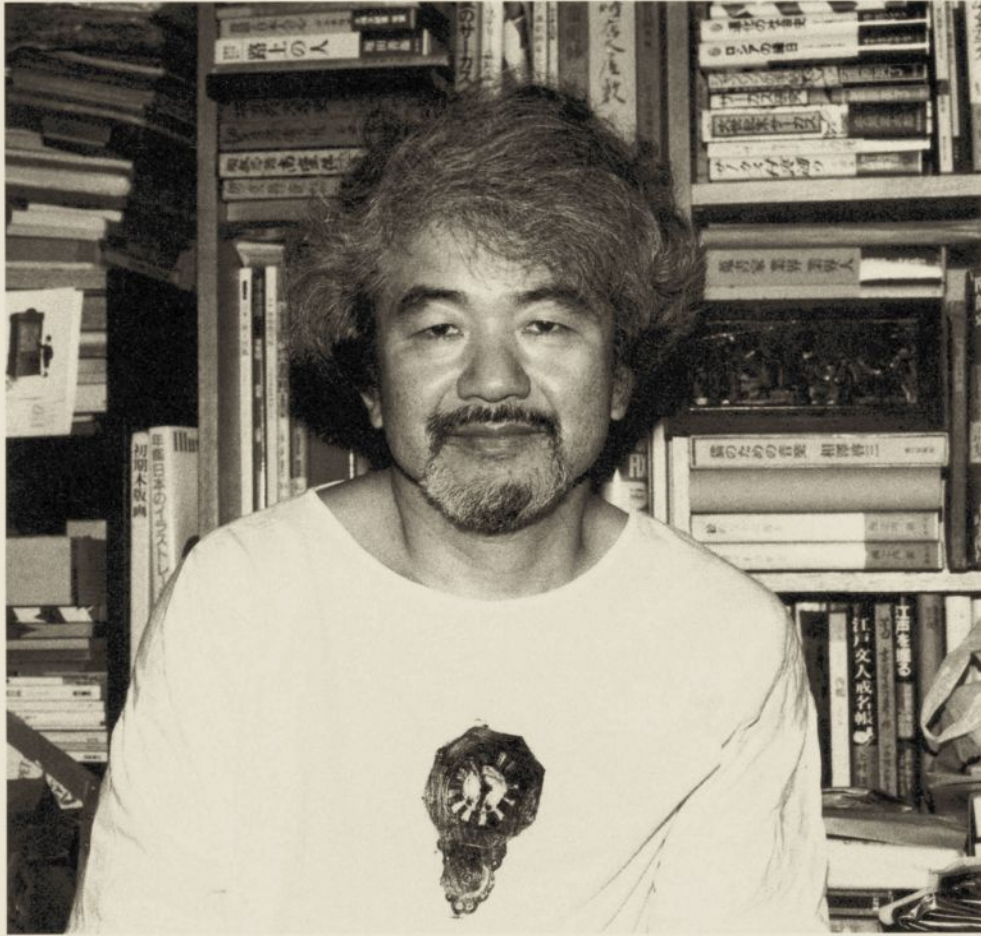
遺作展

10月28日(金)~11月3日(木)

2005年



GALLERY 轍 WADACHI



1989年8月10日 自宅アトリエにて 三友社 畑鎮夫氏 撮影

無一物中無事並藏

千九百八十三年秋
昭雄書



ごあいさつ

この度、故畑農照雄先生の遺作展を開催いたします。

先生が他界されて早1年が過ぎてしまいました。未だに、お元気で当画廊に足を運ばれ、いろいろ楽しいお話をした日々が、昨日のこのように鮮やかに懐かしく甦ってまいります。

画家への志高く36年前に長崎より上京されて以来、先生とは同じ九州人ということもあって、画家と画商との関係以上に、友人としてのお付合をさせて頂きました。亡くなられる3年前に当画廊での個展を約束し楽しみにして居りましたが、病状悪化のため余儀なく延期してまいりました。それがなんと遺作展とかたちになりまして、無念極みのおもいです。

先生は、最初は長崎・パリ風景を中心とする油彩画からの出発でしたが、その後、木版、挿絵、カット、装幀と幅広く、厚みのある作家活動を展開されました。特に木版のユーモアとペースに富む作風は、先生独自の個性を遺憾なく発揮した素晴らしいもので、私たちの心を捉え、その楽しさは格別です。そして、本、新聞などの意を得た挿絵には定評があり、「畑農照雄ここに在り」と世に知らしめた仕事でもありました。

遺作を前に、誠に厩大、膨大な仕事をされた69年であられたことを実感するばかりです。

この遺作展には、初期の油彩・水彩・素描から木版、書、装幀、イラストの一部を展示して、元気に活躍されていた頃の先生を偲びたいと思います。

どうぞご高覧下さいませようご案内申し上げます。

画廊轍 梅野 茂

生前は皆様に大変お世話になりました。

36年前上京後、初めて銀座の倉井画廊で個展を開いて頂きました。皆様の暖かいお力添えによりまして、収入総てを懐に、念願でした憧れのパリへと旅立ちました。

当時、倉井画廊に勤めていらした時からのご縁で、画廊轍の梅野社長のご尽力を賜り、遺作展を開催して頂くことになりまして、心より感謝しております。

石川喬司先生（当時毎日新聞社勤務）に絵を認めて頂き、早川書房へのご紹介を得ましてから、少しずつイラストの仕事が増えて参りました。

講談社はじめ各著名出版社、新聞社の仕事が出来るといことで、張切って仕事をし、掲載された本や新聞は全部取って置く程の思入れ様でした。

パイプを銜えてコーヒーを飲み、ジャズやシャンソンやバロック音楽を聴き乍ら、一心に描いている姿が目には焼きついております。

画家になることは、小学校時代からの夢でしたので、上京してからの人生は本望であったことと思います。

俳句の方も、吉村昭先生、津村節子先生方と、最期までご一緒させて頂きました。

一番初めのイラストの仕事が早川書房のミステリマガジンでしたので、こだわりがあったのか、病床の身をおし、亡くなる3日前に同誌のカットを仕上げました。

パリと長崎をこよなく愛して、描き続けてきた人です。

どうぞ、皆様、ご高覧頂きますようお願い申し上げます。

畑農キミ代

今となつては、誠に言うのも辛いことだが、私ほど畑農さんにご苦勞をかけた作家はいないだろう。

「三毛猫ホームズ」シリーズを始め、いくつものシリーズ物の絵を描いていただいた。そのこと自体はともかく、私自身、五十才を過ぎたころから、めっきり原稿を書くスピードが落ち、毎月の小説誌を三つも四つも書いていて、どれも原稿はいつもぎりぎり。

一体、畑農さんはどうやって絵を描いて下さっていたのだろう。時には（そう年中あるわけではなかったが）、原稿が入らない内に絵を描いていただいたことも。

たまにパーティでお会いすると、こちらはひたすら、「いつも原稿が遅くてすみません」と謝るばかりだった。

それでも、ついつい畑農さんに絵をお願いしてしまうことが多く、いつか三本の原稿を同時並行で書いていて、ふと気が付くと、全部、畑農さんの絵だったことがある。

それほど畑農さんの絵は作者にとっても読者にとっても、「安らぎのある絵」だったのだ。にじみ出るユーモア、暖かさ、そしてどこか懐かしい香り……。

忙しさの中で、畑農さんが私の小説に絵を描くことを楽しみにして下さったと伺うと、いくらか慰められる。

私の本の新しい読者には、これからも畑農さんの絵を楽しんでもらえるのだ。

でも、一度畑農さんに言ってみたかった。

「今月はもう原稿でき上がってますよ!」

と……。

ハートの画伯

石川喬司

ハートの画伯。

畑農さんのことを私はひそかにそう呼んでいた。ハタノ→ハートの、という語呂合わせではない。人生のすべてをそのまま大らかに胸に抱きかかえ、闇の向こうに明るい夢を見つづけた温厚朴訥な人柄。その画業の足跡には、懐かしい人肌の温もりが息づいている。ハートの→肌の画伯、と言い替えてもいい。

この四半世紀、毎年の大晦日を私は画伯とともに過ごした。SFやミステリーを語り、シャンソンやサーカスや歌舞伎を語り、古本や歴史や長崎を語った。夜が更けて、わが家を後にした画伯は、除夜の鐘間近の護国寺を散策しながら、帰宅後取りかかる年賀状の版画の構想に耽るのだった……。あの楽しい語らいの時間をもう持てなくなったことは辛く淋しいが、残された作品は永久に生きつづけるだろう。

一枚の絵は百万語に勝る!

どうぞハートの画伯の深い静かな語りかけに、耳を傾けていただきたい。

今を去る五十五年も昔のこと、高校二年になったばかりの四月、さあ大学受験に備えて真面目にお勉強を、と思ったのも束の間、演劇部の発表会の音響効果のスタッフにとスカウトされ、一度だけならマ、イイカ。

演目は「アリババと四十人の盗賊」。成功裡に終わりましたが、その準備期間中に大道具、背景等を作る手伝いに来たのが美術部の、故畑農照雄君でした。

下絵も無いのに彼の手から描き出されるアラビアの風物。その間に進む彼の言葉のなんと軽妙酒脱、エスプリの効いた会話に魅了され、初めてこの人と友達になりたいと思いました。国民学校時代、戦争の影響もあってか殆ど毎年通算五回も転校し、別れが辛いので友達付き合いも広く浅くと実践。

この時が自分で望んだ友人第一号だった筈です。

幾星霜。彼の第一回個展が、東京銀座の画廊で開催の折。入口から直ぐのコーナーに、小さい多分誰もが見過して行きそうな地味な絵が。突然私の足が止まり、心の中で「又お会いしましたね。」とつぶやいたのです。

その半年程前、島原のキリシタン博物館へ寄った時のこと、そこで初めて話に聞く踏絵を見ました。元元は神神しかったであろうキリストのお顔が何万人否何十万人に踏まれて摩り減った悲しい顔立ち。その瞬間金縛りにあった時のように引き付けられ、身動きできませんでした。

二度も目にする機会に何か絆の様なことを感じ、もうこれは誰にも渡すわけにはいかない。

家族の評価は、小さい、地味、客間には合わない等等。

私の部屋に大事に大事に飾ってあります。私の無二の宝物として。

(高校以来の友人)

父のこと

畑農麻子

情熱の全てを油絵に注いでいた。そんな時代が70年代だったと思う。東京に出てすぐの阿佐ヶ谷アパート暮らし。巴里を描くために渡仏も果した。

初めて見る憧れの巴里の街角では、フランスパンと深炒りの珈琲があればよかった。気の向くまま歩き、スケッチをする。そして、気に入ったカフェを見つけては、パイプをくゆらせ、悦に入っていたに違いない。高級なフランス料理やブランド品には縁も興味もない人だった。

巴里土産は、少し硬くなったフランスパンと機内で余った小さなバターとジャムだった。珍しくて大喜びだった。六才の私には難しすぎる1000ピースのジグソーパズルももらった。完成させたのは数年経ってからだった。子どもが大喜びしそうな物は選ばない。肩透かしをくらったような顔の私に、そのうちわかるさと笑っていた。後で必ず、「ほうら、よかったろうが!」と言うのが口癖だった。

挿絵の仕事が増え、締め切りに追われるようになると、キャンバスに向かう時間は減っていった。カットの載った雑誌や、装幀をした本が店に並ぶのは、大きな自慢だった。その頃から、仕事の資料という大義名分の元にアトリエは古本の山で埋め尽くされることになる。天井まで積まれた本達が、未だに父の存在を主張している。

好んで道化師をモチーフにした父にとってそれは、自分自身だったのかもしれない。人を笑わせ、からかい、おどけてみせる、面白くも哀しい道化師。幼くして母親を亡くした喪失感、満たされない愛情、そういう心の闇からの叫びだったのかもしれない。

純粋な心を持ち続け、貪欲に人生を楽しんできた父。酔うと真っ赤な顔をしてシャンソンを口ずさんでいた。人生に後悔の念がなかったことは、安らかな死に顔が物語っていた。

最後に、遺作展を開くにあたり、ご尽力いただきました皆様に深く御礼を申し上げます。

(長女)

短歌・俳句

「巴里感傷」(問題小説2000年1~12月号扉の木版画に付す)より

サン・マルタン運河の冬を訪ぬればあれもなつかしこれもなつかし
冬ざれの旅の宿のまどろみにノートル・ダムの鐘の音きく
巴里にきてモンマルトルの空みればなつかしきかなユトリロの色
のほりきてノートル・ダムParisの怪獣と春の景色をあかず眺める
ゆく河の流れもかなしポン・ヌフのたたずみてきく手廻しオルガン
わがゆくてさえぎるごとく腕くみて仁王立ちなるバルザック像(モンパルナスにて)
ほのぐらきパリのみでらにひとりいてかすかにゆらく灯をみる
蓄音機ちくおんきでダミアの唄をききしより巴里憧憬パリかぶれ狂とはなりにけるかも
日も暮れよ鐘もなれよとギヨオムのミラボー橋にひとりたたずむ
つかの間の旅にしあれば安宿の夜ふけの窓にパリの灯をみる
昏れなずむサン・ドニ門のかたわらに焼栗を売るあるじえりあびと
巴里を去る前の日なればことのほかエスプレッソの苦き味かな

巴里にきて思うはむかしユトリロがイーゼル画架たてしラバニアジール跳兎亭
寒天やエッフェル塔のつきささる

「長崎感傷」(問題小説2001年1~11月号扉の木版画に付す)より

毬をつく子のひとりいて朽ちかけし唐人屋敷も春迎えけり
長崎は哀しき街ぞ之大浦のサンタマリアに雪降りしきる
大波止の船ゆきかう黄昏れに稲佐の町より灯のともりゆく
きみと会いきみと別れし長崎の四月の空のすこしさびしき
薫風の空にはためく三色旗長崎出島蘭館の夢
ロチも又のほりし坂よ石壘み十人町のあじさいの花
長崎の銅座なつかし暑き日のカフェの露地にクーラーの音
浦上に聖歌ミサひびけり夏彌撒の黒きひとベールの美しき人
蛇踊りもシャギリの音も消えうせてまつりのあとの長崎の空
大波止の鉄砲玉に降る雨をひとり眺めしこともありけり
長崎の秋をおもえばからでら唐寺の魚板の音のほうほうとなる

パラソルの紅の影濃き出島かな 1993年8月

それぞれにすぎた時あり屠蘇をのむ 1995年正月

蟪蛄は念佛となえているごとく 1997年晩秋

点滴よ春のしずくのおちてゆく 2002年3月

のこり世の残りの夢や日記買う 2003年大晦日



年 譜

- 1935(昭和10年)0歳 2月4日、長崎県佐世保市小島町427に、父静雄(海軍工廠の電気技師のち駐留軍勤務)、母ハルの長男として生まれる
- 1941(昭和16年)6歳 佐世保市立国民学校に入学
この時代より画家を志望する
- 1947(昭和22年)12歳 佐世保市立愛宕中学校に入学
- 1950(昭和25年)15歳 長崎県立佐世保北高等学校に入学
美術部に所属し、松尾一枝に学ぶ
- 1953(昭和28年)18歳 国立長崎大学学芸学部美術科に入学
山中清一郎に学ぶ
- 1956(昭和31年)21歳 第1回長崎県美術展出品、入選(以後毎年出品、入選)
- 1957(昭和32年)22歳 国立長崎大学学芸学部美術科を卒業
卒業後、江上小学校・山里中学校・矢上中学校・福田中学校に勤務
- 1960(昭和35年)25歳 第5回長崎県美術展にて長崎新聞社賞受賞
- 1961(昭和36年)26歳 個展 親和銀行本店ホール(佐世保市)
- 1962(昭和37年)27歳 個展 コクラヤ・ギャラリー(長崎市)
- 1963(昭和38年)28歳 3月22日、中島キミ代と結婚、長崎市片淵町3-160に住まう
個展 コクラヤ・ギャラリー、光風堂画廊(長崎市)
- 1964(昭和39年)29歳 第23回水彩連盟展初出品、入選(以後毎年出品、入選)
第9回長崎県美術展にて毎日新聞社賞受賞
個展 コクラヤ・ギャラリー
郷土洋画家新人展に招待出品(以後開催ごと出品)
- 1965(昭和40年)30歳 第10回長崎県美術展にて長崎県教育委員会賞受賞
- 1966(昭和41年)31歳 西日本洋画新人秀作展に招待出品(石橋美術館)
第4回朝日油絵コンクール出品、入選
9月13日、長女麻子誕生
10月、長崎市上小島町172に転居
- 1967(昭和42年)32歳 第12回長崎県美術展にて長崎県知事賞受賞
- 1968(昭和43年)33歳 全国県展選抜展に招待出品(東京都美術館)
西日本コンクール展出品、2点入選
西日本洋画新人秀作展に招待出品
第13回長崎県美術展無鑑査招待出品
- 1969(昭和44年)34歳 第28回水彩連盟展にて水彩連盟展賞受賞 水彩連盟展選抜展出品
3月、中学校辞職 9月、単身上京、杉並区阿佐谷南3丁目(荒井荘)に住まう
- 1970(昭和45年)35歳 9月、キミ代・麻子上京する
早川書房ミステリマガジンの挿絵を始める

- 1972(昭和47年)37歳 1月、第1回新鋭九州作家展出品 銀座アートギャラリー(以後毎年出品)
9月18~28日、個展 倉井画廊(東京・銀座)
渡欧(フランス・パリ)
- 1973(昭和48年)38歳 12月3~13日、個展 倉井画廊
- 1974(昭和49年)39歳 5月、小品展〈パリ風景〉 珈琲の店Cobu(阿佐谷)
杉並区阿佐谷南3-32-17に転居
- 1975(昭和50年)40歳 1月13~23日、個展 倉井画廊
3月、個展 小島画廊
7月3~15日、小品展〈パリ・長崎〉 珈琲の店Cobu
- 1977(昭和52年)42歳 3月7~16日、個展〈マルテの手記〉 四季画廊(仙台)
9月13日、句会「石の会」を天野敬子、石寒太、影山勲、小島香、津村節子、
根岸いさを、吉村昭氏と発足、最期まで参加する
後、大庭みな子氏の俳句の会にも2年余り参加する
10月3~8日、個展〈道化師達の世界—水彩と版画—〉 檜画廊(東京・神田)
- 1978(昭和53年)43歳 小品展〈道化師〉 珈琲の店Cobu
11月19~26日、木版画展 画廊轍松山店(愛媛)、ハヤシ画廊(東京・銀座)
- 1981(昭和56年)46歳 8月、練馬区 に転居
- 1983(昭和58年)48歳 10月、松濤美術館講師に招かれる 以後1994年まで勤める
- 1984(昭和59年)49歳 松濤版の会(金曜・土曜グループ)主宰 毎年グループ展を開催
- 1998(平成10年)63歳 1月、渡欧(フランス・パリ)
- 2000(平成12年)65歳 2月、渡欧(フランス・パリ)
- 2002(平成14年)67歳 3月8日、社会保険中央総合病院に入院 3月15日、胃癌全摘手術 2ヶ月半入院
手術後1週間目から病室で新聞連載の仕事始める
11月、癌転移による横行結腸手術で10日間入院

その後、抗癌治療を受けながら自宅療養、間で治療のため1週間入院
- 2004(平成16年)69歳 2月29日~3月10日《「虚無への供物」刊行40年記念企画》永遠の薔薇—中井英夫へ
捧げるオマージュ展に出品 ギャラリーオキュルス・古書啓祐堂(港区高輪)
5月17日、入院
7月30日、早川書房ミステリマガジンのカットを寝たまま仕上げる
8月2日、癌性腹膜炎のため永眠

9月20~26日、松濤版の会金曜グループ展開催 銀座アートギャラリー
生前の企画のまま、会員の重信常喜氏の木版画による「1910年パリ大洪水展
—畑農照雄 松濤版の会の友と共に—」として、グループファイナーレ展、畑農照雄
追悼遺作展になる 遺作の油彩・水彩・木版画、書、装幀、イラストを出品
- 2005(平成17年)没後1年 10月28日~11月3日 畑農照雄遺作展 画廊轍(東京・銀座)

イラスト掲載

毎日新聞 サンデー毎日 東京新聞 日本経済新聞 読売新聞 週刊読売

大阪民主新報 社会新報

新聞三社連合・学芸通信社・大橋文芸企画・三友社・共同通信社などの配信する新聞各紙

(また以下の各社の刊行物)

朝日ソノラマ 岩崎書店 岩波書店 潮出版社 学習研究社 角川書店 企画制作四谷事務所

奇想天外社 ケイ・アンド・デイコーポレーション 芸術生活社 コーキ出版 廣濟堂出版 講談社

交通タイムズ社 光文社 埼玉福社会 サン・リオ 実業之日本社 集英社 主婦と生活社 小学館

祥伝社 晶文社 新英社 新人物往来社 新潮社 スコラ 青春出版社 全日産自動車労連 大楊社

大陸書房 筑摩書房 中央公論社 天山出版社 電通 東映・京都 桃園書房東京創元社

徳間書店 日本交通公社 日本放送出版協会 話の特集 早川書房 P・H・P研究所 婦人画報社

双葉社 フロンティア 文藝春秋 文源庫 毎日新聞社 漫画社 三笠書房 みすず書房 リクルート

リクルート情報出版 など

単行本・文庫本の装幀・イラスト

赤川次郎 浅倉久志 阿刀田高 新井素子 石川喬司 大庭みな子 折原一 加賀乙彦

川田文子 胡桃沢耕史 椎名誠 志賀貢 白石一郎 陣舜臣 菅原康 高橋治 高橋義夫

岳宏一郎 立松和平 辻真先 筒井康隆 都築道夫 天藤真 常盤新平 難波利三 西田敬一

畑山博 半村良 久間十義 藤本義一 松永伍一 三國一朗 三田村信行 宮崎惇 宗田理

村松友視 素九鬼子 百田弥栄子 山田風太郎 山田正紀 夢枕獯 吉川良 吉永みち子

吉村昭 米原万里 和久峻三 他

(敬称略)

主な作品収蔵

松濤美術館

長崎市役所

親和銀行

長崎県食糧卸連合会

和同エンジニアリング

他

畑農照雄遺作展／図録

発行・有限会社 画廊 轍

東京都中央区銀座1-7-16 扶桑ビル4階
〒104-0061 電話 03(3563)0886

制作・有限会社 フジ印刷

Printed in Japan 2005
